（財）女性のためのアジア平和国民基金

原文兵衛理事長を偲ぶ会

以文會友
以友輔仁

原　文兵衛　理事長を偲ぶ会
平成十一年十二月十二日

表題「以文會友以友輔仁」は、原文兵衛理事長の著書「折々の記」正続（発行出版社）の表題から使わせていただいた。原理事長の旧稲田和高等学校の漢文の教師（普潤宗管長、永平寺貫首、泰慧玉禪師）から入園の際贈られた色紙「君子以文會友以友輔仁」（出典は論語・顔淵）に拠っている。

故原 文兵衛理事長

故原 文兵衛 理事長
略歴

大正二年四月	東京生まれ
（一九一三年）	
昭和十一年	東京帝国大学法学部法律学科卒業
（一九三六年）	旧内務省採用、警視庁警部補に任命
	以後、内務省、警視庁、警察庁
昭和三十六年二月	警視総監
	（昭和四十年一月警視総監退任）
昭和四十六年六月	参議院議員
	以後四期二十四年、各種委員長など歴任
昭和五十六年十二月	国務大臣環境庁長官
平成四年八月	参議院議長
（一九九二年）	
平成七年七月	財団法人女性のためのアジア平和国民基金
（一九九五年）	理事長
平成十一年九月七日	永眠
（一九九九年）	

感謝のことば

二

原さん、

基金創設の日から、
私たちを残して
あの世に旅立たれてしまった時まで、
あなたは
文字通り基金の大黒柱であり、
私たちの心の支えでした。

参議院議長まで勤め上げられたあなたにとって、
マスコミからあれほど叩かれていた
ちっぽけな
アジア女性基金の理事長職を引き受けるなど、
誰が考えても割の合わない
人生の最後の貴重な時期を台無しにする
愚かな決断だったに違いありません。

でも、
日本が
かつて犯してしまった
慰安婦問題という罪を償わなければ、
そしてそのためにはアジア女性基金を創らなければという
日本国民と政府の真摯な気持ちに、
原さん、
あなたは応えて下さったのです。

理事長就任後の四年二ケ月は、
最初に原さんが考えられたより
もっと厳しい日々でした。
遅々として進まない基金の財団法人化。
マスコミや一部の団体からの理不尽な非難。
困難を極める韓国と台湾の償い事業。
時には午前一時、二時まで続く理事会、運営審議会、三者懇談会。
心労の余り入院されたこともありました。

私たちから見て、
明らかに消耗しておられる深夜の会議もありました。
それでも、
一言の愚痴もこぼさず、
黙々と、
この上なく暖かな慈しみをもって、
あなたは任務を果たされました。

その姿を見て、
その原さんがおられるという、
ただそれだけで、
私たちはどれだけ励まされ、
絶望の淵から引き上げられ、
ささくれ立った心が癒されたか、
知れません。

基金の事業が、
政府からもマスコミからも、
元慰安婦の支援団体からも、
いや一部の被害者からさえ、
十分な理解が得られず、
ともすれば徒労感に押しつぶされそうになる私たちが、
ここまで持ちこたえて来ることができたのも、
原さん、
あなたの存在があればこそでした。

私たちの感謝の気持ちは、
とても言葉に尽くすことはできません。
でも、
この気持ちだけは、
天国におられる
原さんの元に届くと信じています。
原さん、
本当に、本当に、
ありがとうございました。

一九九九年一二月一二日

女性のためのアジア平和国民基金一同

原文兵衛理事長を偲ぶ会

次第

平成十一（一九九九）年十二月十二日
グランドアーク半蔵門

司会進行
伊勢 桃代（専務理事・事務局長）

開会
山口 達男（理事長代行・副理事長）

偲ぶことば
有馬 真喜子（理事）
橋本 龍太郎　前内閣総理大臣
古川 貞二郎　内閣官房副長官
和田 春樹（運営審議会委員長）
大沼 保昭（理事）

メッセージ
河野 洋平　外務大臣
（河南惟茂アジア局長代読）
五十嵐 広三　元内閣官房長官
谷野 作太郎　在中国日本国大使
平林 博　在インド国日本国大使

感謝のことば
金平 輝子（副理事長）

献杯
石原 信雄（理事）

思い出のことば
下村 満子（理事）
宮崎 勇（理事）
三木 睦子
瀬田 信哉　元環境庁長官官房広報室長

原光子・理事長夫人ごあいさつ

閉会
衛藤 瀋吉（理事）

故原理事長を偲んで一堂に会し、原理事長への深い感謝と存在の大きさをかみしめ、思い出を語り合った

開会ごあいさつ

理事長職務代行・副理事長
山口　達男

本日は、年末のお忙しい中を原文兵衛理事長を偲ぶ会にご来場たまわり、アジア女性基金を代表して、厚くお礼申し上げます。

原理事長の通夜、ご葬儀・告別式が九月十日および十一日、自民党・原家合同葬で盛大に行われ、葬儀委員長としての小渕自民党総裁・総理大臣、アジア女性基金創設以来歴代の村山元総理大臣、橋本前総理大臣を始め政治家の方々、政界・財界にわたる原理事長の永年の知己の多数の方々がご参列になり、いまさらのように原理事長のご人徳、その長いご経歴の中で培われた人脈の広さと深さに感じ入った次第でした。

七月末まで理事会で原理事長に接しておりまして、夏休み明けにまた、ふくよかな温容の理事長にお会いできることを、当然のように予定していたわれわれ基金関係者にとって、ご逝去の報はあまりに突然でございました。

その後の理事会で大きな存在を失ったことを、われわれはしみじみ噛みしめてみて、「基金」の仕事で原理事長とかかわった方々とともに原さんとおつきあいさせていただいた個人としての思いを語り合い、原さんという人間との交わりを偲ぶ趣旨の会を、「基金」としてぜひ立ち上げたいと念願いたしまして、御奥様始めご遺族にお願いし、「基金」一同の思いを込めて、今日の偲ぶ会を開催するに至った次第でございます。

本日は、原理事長とご縁の深かった多くの方々に偲ぶ言葉、思い出の言葉をかずかずお願いしておりますが、ご遺族のご意向で選ばれたフォーレの「レクイエム」の調べに原さんへの思いを込めて、この席が、お一人お一人にとって、偲ぶお言葉を通じて心の温かさを分かち合う、よい機会になりますようお祈りいたしまして、開会のごあいさつといたします。

偲ぶことば

寡黙だが、肝心なとき明確なご方針

理事（前副理事長）
有馬　真喜子

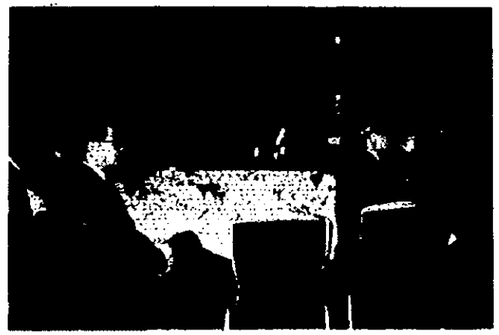
女性のためのアジア平和国民基金（アジア女性基金）が発足したのは平成七年、一九九五年七月十九日でした。戦後五〇年の節目の年に当たり、戦争責任、戦後責任をめぐる世論が噴き出しているころでした。

その前年から、当時の与党三党は、「戦後五〇年問題プロジェクト」を設置し、戦後五〇年の年への取り組みのために、いくつかの検討を進めておられました。いわゆる従軍慰安婦であった方々へのお詫びと償いを行うための「アジア女性基金」の構想はその大きな柱でした。

構想が発表されると賛否両論の世論は激しく、基金は荒波の中を船出しなければならないことが予想されました。そうした環境の中で、基金の理事長をお引き受けくださったのが、当時参議院議長だった原文兵衛先生でした。原議長が理事長をお引き受けくださったとうかがったときの感動と安堵を私は忘れません。参議院議長室におれにうかがったとき、原先生は、あの温顔で、皆さんもご苦労さんですね、とかえって私たちを励ましてくださいました。

平成七年、一九九五年八月一日の基金の初めての理事会の際、原理事長は、私たち日本国民一人ひとりが、元慰安婦であった方々の痛みをしっかり受け止め、すでに高齢になっておられるこの方々の苦しみが少しでも緩和されるよう最大限の努力をすることが大切であると述べられ、同時に、過去の反省にたって、今日の女性の名誉と尊厳を侵害する行動にも断固として取り組んでいかなければならないと、基金の方向をしっかり示されました。

理事長に就任されてからの原理事長について、基金に関係する多くの者がもっとも印象に残っているのは、当時頻繁に開かれた基金の理事会や、呼びかけ人・理事・運営審議会委員で構成する三者懇談会が、どんなに夜遅くまで続いても、またその後の記者会見がど



んなに遅くなっても、理事長は端然としてその場に同席してくださっていたことです。午前一時、二時になることも珍しくありませんでしたが、理事長はまったく席をお立ちになりませんでした。

また、一つ一つの対立点をめぐって基金の理事会や三者懇談会で激しい言葉が飛び交うことがありましたが、そのときも理事長はだれの意見にもじっと耳を傾けていらっしゃって、そのうち議論は静まりました。理事長の存在感の大きさは、他のどなたにも代えがたいと私たちは痛感したものでした。基金に関係する人々は、戦後補償問題や国家責任の在り方について、個人的にはさまざまな意見をもっています。決して一枚岩ではありません。その人々が、あれから四年余り、さまざまな困難に直面しながらも、こうして力を合わせて仕事を続け、一定の成果をあげることができたのは、ひとえに原理事長という求心力があってのことと、今更のように思います。

原理事長は寡黙でいらっしゃいましたが、肝心なときにははっきりと必要なことをお示しになり、方針を出してくださいました。私の手元には、原理事長がお書きになった一枚の紙があります。さまざまな意見があった初期の理事会にあたり、理事長が基本方針を示されたものです。それにはこう書かれています。

一、償い金は一律三百万円とすること

一、実情に応じて介護給付（仮称）を行うこと

一、右は基金設立後一年の七月、遅くも募金開始後一年の八月十五日迄に開始すること

このように、理事長のご方針は明確でした。

理事長を喪ったいま、私たちはしばし途方にくれています。しかし、理事長のご指導のもと進めてきたこの事業をとどこおりなく、誠実に続けることこそ、理事長のご恩に報いることと存じております。

理事長、数々のご指導、ありがとうございました。

温かくて、こわい「おじさん」

前内閣総理大臣
橋本 龍太郎

いま、「基金」発足当時の経緯、その中でスタートした理事会あるいはその他の場、そこにおける原先生のお話をうかがいまして、私たちが知らなかったことをまた一つ教えていただいた思いがします。ちょうど村山内閣の時に発足いたしましたこの「基金」事業、当時各界からのお顔を見ましたら、まったく守備範囲外の方と思っておりました私自身、その人選のプロセス等々について、まったく事情を知りませんでした。ただこの「基金」を発足させるには一体、どなたがいいかと自分なりに考えたことがありました。

原先生が理事長をお引き受けになられたとうかがい、その後お会いしたときに、つい申し上げたのは、「おじさん、大変だよ。また大変な仕事をやるの」。半分慰めの気持ちでそのような言葉を使ったのですが、同じような場面で同じようなことを申し上げたことを思い出しますが、その時はまったく異なったご返事でした。「大変だし、いやな思いもすると思うが、誰かがしなけりゃいけないし、僕たちの時代の人間がしなければ、後の人たちはわからないよ」。このような言い方でご自分の決心を述べられたことを思い出します。いま有馬さんのお話をうかがって改めて思い起こします。

私にとりましては「基金」理事長としての原さんにはそのような思い出がありますが、むしろ警視総監を務めておられるとき、そしてもっと前、私の父親が非常に好きな官僚、旧制の高等学校―東京帝国大学の道から官界に入った、非常に尊敬して話をするお一人でありました。ですから、私にとりましては原さんのおじさんという感じが一番ぴったりしたし、いまでも実はおじさんということが一番語りかけたい言葉です。

ちょうど公害防止事業団をつくるときに、当時、関係する省庁で、いまでも同じですが、ポストの争奪戦が始まり、佐藤内閣が大変調整に困っていたときに、どなたが言い出されたのかわかりませんが警視総監を退かれて間もなかった原さんというお話が出てきました。当時厚生省の政務次官をやめて公害対策特別委員会の理事をしておりました私、その瞬間、「ああ、原さんならいいなあ。だけど原さん、あちこちの公害をどの程度知っているかなあ」――そんなことを思いました。そして公害防止事業団の理事長になられて、「おじさん、またひどい仕事をしますね」と、最初にいったのがその時でした。「うん、僕が出るともめないんだよ」。これは大変な名言でした。事実、原文兵衛という名前が登場した瞬間から各省庁のポスト争いがぴたりと収まりました。厚生省、大蔵省―このポストに固執した省庁も、原さんという名前にだれもクレームがつけられなかった。そんなことを今、懐かしく思い出しております。

ところが当の公害防止事業団理事長の原さんに、いつのまにか当時の東京地方区参議院議員の話がマスコミに伝えられ始めました、そして環境庁のみなさん、公害防止事業団のみなさんと関係の国会議員が会食をしました折りに、「おじさん、ほんとに選挙やるの。取り締まるほうの大将がどういうふうにやるの」と聞くと、「どうも断りきれなそうなんだよ、しようがないんだよ」と、ぼそっとそういわれました。そして、「やることになったら、きみ、前座委員で来てくれよ」といわれました。

公認候補に決まって、参議院議員選挙の告示になり、何度か前座に出てまいりました。率直に申し上げて選挙が始まりますと、警察官僚というイメージがなかなか拭えませんでした。しかし演説会場に来て実際に会って話を聞いてくださると、その看板はすぐとれるのですけれど、確かに警視総監まで務めあげた警察官僚であるし、何となく堅苦しい、権力主義的なイメージを取り払うのに大変苦労しました。

だれが最初に考えついたのか知れませんが、原先生の麻雀仲間を演説会場にお呼びすることに気がつき、当時テレビでおなじみの深かったある奥様に出ていただいた。その方が（話は）何でもいいんですねというので、もちろん結構ですというと、その方が賭け麻雀の話をされ始めまして、大変あわてました。―警視総監の公邸に麻雀で誘われて初めておいでになり、そして総監と初めて麻雀をした。たぶん賭けはよくないだろうなと思いつつ、どうも面白くない、言い出すのを遠慮していたが、ついに「チョコレートでも賭けません？」といったら、原さんのおじさんが目を丸くして「麻雀てのはおカネ賭けないと、つまらないんだよねえ。あなた、おカネ賭けたことあるの」といわれた。この話をすると会

場は大爆笑でした。舞台の隅でなんとも困り果てた顔で、もじもじしておられた原さんのお顔が、投票間近になるころには、警察官僚というイメージがすっかり変わっていました。

私からいいますと、本当に言葉の深い、温もりがある、ほそぼそとしか話さないけれども、肝心な時には非常にはっきりと自分の考え方をお述べになる。温かいけれども、こわいおじさんでした。今日、会場をここに選んでいただいたのは、おそらく原さんのおじさんに一番安心でうれしい場所と思っていらっしゃるのではないでしょうか。総監になられてから、ずいぶん長い年月が経っている。すばらしい総監だったと言い伝えが残っている原さん、「基金」の理事長として、「誰かがしなければならないし、僕らの世代にしなければならないことなんだ」と、そういわれた通りの仕事して、ようやく休んでいただく、改めてお礼を申し上げます。

総理在任中訪ねていただくたび、「基金」の話になる。ときどき二人とも脱線して、原さんの方は私が総理であることを忘れて話す、私の方も「おじさん、ところで」と別の話を持ち出す。そんな思い出話を積み重ねてきたことを、いま、人生の大先輩からすばらしいさまざまなことを教わったことへの感謝の気持ちとともに、お話させていただきました。どうぞ奥様、お体を十分おいたわりくださいますよう、心からお祈り申し上げます。

国家・国民を考える高い志

内閣官房副長官
古川　貞二郎

原先生のご遺徳を偲び、感謝を申し上げるとともに、この「基金」に携わって来られた方々、また「基金」事業を支えて来られた方々に対し、この席をお借りいたしまして心から感謝を申し上げます。

私は平成七年の二月二十四日、本「基金」の理事をしておられる石原信雄さんのあとをうけて、「基金」の設立作業にかかわったわけです。「基金」が発足したのがその年の七月でしたから、五か月間、当時の五十嵐官房長官、現中国大使の谷野外政審議室長、現外務次官の川島アジア局長が主に「基金」設立作業にまい進した方々でした。もちろん、この間には、本日ここにご参列の方々をはじめ、いろいろな方々に大変なご協力、ご指導、ご苦労をいただきました。

「基金」の構想がまとまって、一番大きな問題は、どなたに理事長になっていただくかということでした。大変「基金」事業の運営は難しいし、重要な事業であるので、高い識

見はもとより、知名度の高さ、それから多くの方に慕われる、人望がおありになる、そういう方がふさわしいという話になりました。そこで、私の記憶では、どなたがいいか五十嵐官房長官を中心にお話をしている中で、原参議院議長が任期満了でお辞めになる、それでは原先生にお願いしたらという話になったと記憶しております。ある日、五十嵐官房長官がにこにこして、「原先生にお引き受けいただくことになりましたよ」と、本当にうれしそうにおっしゃったことをよく覚えております。

爾来、四年数か月にわたって、原理事長を中心にして、関係者のみなさんの大変なご努力で今日に至っており、橋本総理のもとで確か平成八年の八月、「基金」の嬉しい事業が開始されたのでした。本当に、原先生にお世話になりました。

いま有馬理事、橋本先生からもお話がありましたが、どんな厳しい条件の中でも、原先生は大変穏やかで温かで春風のような方、身体も大きな方ですが、底知れない心の大きさ、広さをお持ちの方だなとしばしば思っておりました。私も厚生省という旧内務省の系列につながる役所にいたのですが、われわれはいつも先輩から、内務省には、国家・国民というものをいつも考えているのだ、高い志をもって仕事をしているのだと、しばしば聞いて来たのです。そういう話をうかがう中で、本当に原先生は、旧内務省の、国家を支え高い志で仕事をしていくという先輩であり、ずっと末席につながる後輩として、大変うれしいことと思ってまいりました。

ことしの八月末に、かつて原先生の秘書をしておられた長野政人さんから、原先生が軽井沢で体調を崩され大変厳しい状況であるとの話がありました。積年の「基金」に対する先生の大変なご努力、あるいはご心労があったのではないかと案じ、是非ともご健康を回復していただきたいとお祈りしていたのですが、ご家族や多くの方々の願いもむなしく、先生は逝ってしまわれ、まことに残念でなりません。

本日、在りし日の先生のご遺徳を偲び、さらに私どもは先生の志を継いで、さらに努力していくことをお誓いいたします。また、「基金」の事業に関わり支えて来られている多くの方々に対して、心からの感謝を申し上げ、奥様をはじめとするご家族の皆様方のご健勝を心からお祈りいたします。

最後になりますが、小渕総理、青木官房長官からも原先生、また「基金」の皆様方に感謝の気持ちを伝えてほしい旨の話があったことをお伝えし、ごあいさつといたします。

政治家として誠意を尽くす

呼びかけ人・運営審議会委員長
和田　春樹

私は、呼びかけ人になるように谷野さん（内閣外政審議室長＝当時）から話があり、長く返事をしていなかったのですが、最後の発表の前夜あたりにお引き受けすると返事しました。いろいろと「基金」は難しい問題を抱えていました。初めから理事長に原先生がなってくださるということになったときは、非常にうれしく思った次第です。それはサハリンの韓国人の帰還問題に対する原先生のご献身を承知しておりましたから、非常によい方だと思いました。もう一つは、参議院議長であった方が、そのまま「基金」の理事長になってくださるということは、政府とともに国会が挙げて「基金」を支持してくださることの徴であるように思えたから、非常にうれしく思ったのです。

それまで原さんを個人的にはまったく存じ上げませんでしたが、一緒に仕事をさせていただくようになり、非常に驚きました。原先生は、私たちの想像を超えるといいますか、非常に献身的な方で、私どもはボランティアで活動しているのですが、まさに原さんもボランティアとして、そして一人の人間として、「基金」に誠実に関わられました。会議への参加ぶりなど、ひとしく感動したものです。

この四年間は、原さんとは、同じ苦労をする仲間として、一緒に活動してまいりました。原さんは、「基金」の中ではただ一人の政治家でした。したがって、政治家として自分がここに立っているということを、その責任を、だれよりも強く感じておられるように私は拝察しておりました。戦争中、国家中央の一員であったということに責任があるということを、いろいろな席で話しておられます。戦後五十年が経って、ひどいめにあった方々に対するお詫びと償いの事業が遅れていること、ようやくそれが実行されることになった。しかし、それはなお不自由さをもっているということも、原さんは非常に感じておられて、その枠の中で誠心誠意尽くされ責任を果たしていこうと心を決めておられるように見えました。

市民の立場から、私どもがいろいろと意見を述べて、政府や政治家や役所の方に批判を出したりするのですが、それを最後までじっと聞いて受け止めて、そしてわれわれが合意をすればそれを掛け合って、実現するのは自分の責任であると心に決めておられたように思います。橋本総理の「お詫びの手紙」の件では大変緊張して論議をしたのですが、夜遅くまでの会合にも原さんが出てくださいました。そして募金が「基金」の償いの事業に果たして足りるかという心配がありましたが、それも原理事長は橋本総理に掛け合っていた

だいて、「最後は政府が責任をとる」という約束をしていただいたというふうに、私たちに話してくださいました。

原さんは、韓国のことについては、人一倍心を砕いておられました。韓国とは深い関係をもっておられます。「基金」が始まったときに、一〇〇万円以上の募金をしていただいた方も何人かおられます。その中の一人、練馬区に住んでおられる事業家が一〇〇万円を寄付してくださいました。私がお訪ねしますと、その方は在日韓国人の方でした。その方がおっしゃるには、ハルモニたちは非常に高齢である、一日も早く措置をとってほしいと、妻は反対したが自分としては拠金した、とおっしゃられました。さらにもう一つおっしゃられたことは、自分は原先生を尊敬している、だからこの「基金」に拠金したのだといわれました。これまで、このことは申しておりませんでしたが、お伝えしておきます。

韓国での事業は非常に厳しい状況がつづいているのですが、原さんは理事長として、はっきりと韓国人に対してメッセージを出されました。九六年十二月二十四日の「朝鮮日報」のインタビューに答えられた言葉は、私たちの気持ちを代表されたものです。

「日本の国民の中には、『慰安婦』の存在を否定するものもあるが、大多数の国民の間に、アジア女性基金の設立趣旨が行きわたっている。すなわち基金を通じてアジア各国に謝罪の気持ちを伝えなければならないという考えを持っている日本人が多いのである。『従軍慰安婦』を否定する意見をマスコミが大きく報道するので、なにかその意見が多数であるように見えるけれども、沈黙している多数がはるかに多い。アジア女性基金の事業を自分は失敗とは考えない」

このように、はっきりと述べられました。それから、韓国の政府がアジア女性基金の「償い金」などを受け取らなかった被害者のために支援金を出すということ決定をなされたときに、理事長が「基金」を代表されて、金大中大統領に対して謝辞を送ってくださいました。それを持参して韓国大使とお話し合いをしてくださったということも、非常に重要なことでした。残念ながらそれは聞き入れられておりませんが、しかしいつの日か、韓国の政府と国民がその気持ちを受け止めてくださると信じております。

原さんは、「基金」にきて、このような無私の姿勢をもったひとびとと一緒に仕事をしたのは初めてである、非常に自分はうれしいと、私たちに話して励ましてくださいました。私たちもまた、理事長のような良心的な政治家と仕事ができたということは、非常にうれしいことであり幸福だったと思います。政治家と市民が協力してことにあたっていかなければならないこのときに、私たちに希望を与えられた、そういう経験であったと思います。

心から、原先生の、ご冥福をお祈り申し上げます。

稀有の人、原 文兵衛

理事、東京大学教授
大沼 保昭

私は、一九九五年七月、原さんに基金の理事長就任をお願いに行ってお引き受けいただき、九九年九月、原さんが亡くなる前日に佐久の病院にお見舞いに行って集中治療室でお目にかかるという形で、原さんと基金のつながりの最初から最後まで居合わせることになりました。こうした原さんとの縁はサハリン残留朝鮮人の帰国運動を通してのもので、それが原さんと基金を結び付けることになりました。

私は一九七五年からこの運動にかかわっていましたが、当時のソ連と韓国の関係はきわめて厳しいものでした。日本政府の対応も、後に駐独大使を務めた渋谷治彦氏など、ごく一部の例外を除いてはおざなりなもので、サハリン残留朝鮮人の永住帰国実現の見通しはまったく立ちませんでした。八六年十月、私はソ連と太いパイプをもっていた松前重義さんに誘われてソ連を訪問し、直接ソ連当局に韓国への帰還を認めるよう訴えました。松前さんは、当時私が相談していた外務省の幹部が「こういう問題は、政府間交渉よりむしろ松前さんのような民間のパイプを使った方が上手く行く可能性が高い」と言っていたほど有力な方でしたが、その松前さんに同行しての訴えも効果はなかったのです。

十年以上運動に従事して疲れ果て、「今度こそ」という期待が大きかっただけに絶望も大きく、立ち直れない状態がしばらく続きました。ただ、逆にそうした絶望感がバネになったのか、それまで仲間と議論はしてきたが踏み出せなかったこと、つまり、超党派の議員懇をつくって問題解決に動いてもらおう、という気になりました。原さんに初めて会ったのは、ようやく私にその決心がついた八六年十二月、日ソ円卓会議の席上でした。「サハリン残留朝鮮人」というマイナーで、しかもソ連側の嫌がる私の報告を、原さんは座長として熱心に聞いてくださいました。私は感ずるところがあって、原さんに詳しい話を聞いていただきたい、とお願いして、一緒に運動をやっていた高木健一弁護士と共に議員会館に原さんを訪ねたわけです。正直、元内務官僚・警視総監という肩書きは私たち市民運動に従事していた者が忌避してやまないものでしたが、悪魔と手を結んでも、という気持ちになっていた私にはもう気になりませんでした。

私がサハリンに朝鮮人が取り残された経緯を説明して、彼らが故郷に帰れるようにすることは日本の戦後責任であると説くと、原さんは、そういう事実があることはまったく知らなかった、自分はかつて内務省で働いていた、そういう人たちを直接サハリンに送り込んだわけではないけれど、政府の一員として責任を感じる、お役に立てることがあれば協力したい、と言ってくれました。原さんは悪魔とはまさに正反対の人だったのです。原さんは、社会党の五十嵐広三さんと一緒になって議員懇設立に尽力し、議員懇は原会長、五

十嵐事務局長という体制で、翌八七年七月に発足しました。

この議員懇は、働きかけの対象になった外務省の幹部が「こんなによく働く議員懇は見たことがない」と言ったほど、熱心に動いてくれました。どっしりと構えて、温厚で篤実そのものの原さんと、同じく温厚で、他方政策立案能力と行動力のある五十嵐さんとのコンビは、私たちまわりで働く者から見ても理想的な会長・事務局長の組み合わせでした。こうした中で原さん、五十嵐さんとは個人的にも親しくなり、私の家で食事をご一緒したり、家族で原さんの公邸にうかがったり、大沼ゼミの同窓会に出ていただいたり、ということになりました。こうしたことを原さんが日経の「交友抄」に書かれたことがあって、私は普段大学では市民運動をやっている変な奴と見られているのですが、この時だけは参議院議長の「お友達」というので同僚から見直される―もっとも、この効果はせいぜい一週間しか続かなかったのですが―といったこともありました。

原さんたちのお陰で、村山内閣の時に官房長官が五十嵐さんだったこともあり、日本政府の予算で残留朝鮮人の帰国のための施設を韓国につくることになりました。韓国政府による建設敷地確保に時間がかかりましたが、九九年三月にようやく小規模な医療福祉施設が完成し、二〇〇〇年早々には一〇〇〇名規模の帰国者用のアパートが完成します。これは原さん、五十嵐さんをはじめとする日本の政治家が戦後責任を認め、何とかこれを果たさなければ、という責任感をもって働いてくれた賜物であり、憂鬱なことばかり語られる日本の政治に、一抹の光明をもたらしてくれるものです。

この村山内閣の時に、五十嵐官房長官は「慰安婦」問題を何とか解決したい、という強い希望をもっていました。河野外相も同じ考えでした。ところが、九五年の五月に五十嵐さんが「償いの四つの柱」を打ち出した時点でも、日本国民による償いの中核となるアジア女性基金の理事長は決まっていませんでした。基金の性質からいって理事長は女性でなければ、というのが、理事長探しにあたった人たちの思いでした。しかし、有力候補の名前が新聞に出てしまって本人が怒っているという話が伝わってきたり、別の有力候補者は本人が頑として受けないなど、理事長探しは完全に行き詰まってしまいました。

六月二十八日に総理と呼びかけ人が夕食を共にして懇談した時点でも、理事長はまだ決まっていませんでした。私はたまりかねて、宿舎に帰る五十嵐さんの車に一緒に乗って、「もうここまできたら、理事長＝女性という発想を変えなければダメだ。女性にこだわらなければ、原さんというこれ以上ない候補者がおられる。原さんにお願いしてはどうか」と、五十嵐さんを口説きました。

その後五十嵐さんは政府部内で検討されたのでしょう、七月十二日に原さんのところに行くから同行して欲しい、と言われました。私は、「ああ、決断されたんだな」と思い、一緒に車に乗りました。ただ、参議院議長まで務め、まさに功なり名遂げた原さんが、マスコミであれだけ叩かれ、評判の悪いアジア女性基金というちっぽけな団体の理事長を引き受けてくれるだろうか、という不安は強いものでした。戦後五十年の八月十五日までに基金の体裁を整えるには、理事長はもうとっくに決まっていなければならない。原さんに断られてしまったら、もう後はない。参議院に向かう車の中で、私は祈るような気持ちでした。

参議院議長室に入って着席すると、五十嵐さんはこぼれるばかりの笑顔で――五十嵐さんは実に笑顔の魅力的な政治家でした――、「いやあ、原先生、今日は一つ、大事なお願いがあって参りました」と言いました。そしていきなり、「それじゃ、大沼先生、どうぞ」と、私の方を向かれました。「どうぞ」と言われても、私は何も聞いてないのです。「五十嵐さん、それはあなたの仕事でしょう」と、喉まで出かかりましたが、原さんはすでに私をじっと御覧になって、「さあ、聞きましょう」という構えなわけです。

「これはもうしょうがない」と覚悟を決めて、お話ししました。「慰安婦」にされた方々がどれだけ悲惨な人生を送ってこられたか。法的な制約と政治的な諸条件の中で、その償いは日本の政府と国民の共同事業という形で果たさなければならない。そのためには国民からの拠金を受けて元「慰安婦」にそれをお渡しする基金が必要で、その理事長には国内的にも対外的にも納得していただける方が必要だが、それは原さんしかいない。この問題の解決には日本の名誉がかかっている。こういったことを、できるだけかいつまんでお話したと思います。

原さんは、じーっとお聞きになって、「五十嵐先生と大沼先生とはずっとサハリンの問題を一緒にやってきた仲で、そのお二人がわざわざ来て下さった。これが重要な問題であることは自分も承知している。自分がどれほどお役に立つか分からないが、私にできることがあるのであれば、お引き受けしましょう」と、おっしゃいました。私は学者ですから人には惚れません。人に惚れ込むというのは、その人の言うことは間違っていても従うことです。それは学問とは正反対のものですから、人には惚れてはならない。これが私の信念です。

しかしこの時だけは、「ああ、この人には、どんなことがあっても最後までお仕えしなければならない」と、心の底から感じました。それほど原さんの引き受け方は潔かった。一晩考えさせて欲しいとか、こういう条件を付けて欲しいとか、これから余生を楽しむつもりでいた八十二歳の参議院議長なら当然あっていいセリフは、一言もありませんでした。

ただ、引き受けた後で、原さんは同席していた谷野作太郎外政審議室長の方を向いて、「政府はしっかり支えてくれますね?」と聞かれました。当時の政府は五十嵐官房長官が代表しているわけですから、谷野さんに念を押した原さんの真意は、外政審や外務省―つまりお役所―が、村山内閣の後もきっちり協力してくれるか、それを確かめたかったのだろうと思います。谷野さんは、「もちろん、全面的にお支えします」と答えられて、後は四方山話になりました。

しばらくして私共は引き上げたのですが、議長室のドアを閉めるなり、誰からともなく「わっ」と抱きついて、五十嵐、谷野、私の三人が「やった、やった」と肩を組んで帰ったのを記憶しています。今にして思うと、大の男三人が参議院議長室のドアの外で、「やった、やった」と抱きついてる姿というのはかなりみっともない光景で、記者がいなくてよかったと思いますが、あの時のわれわれの嬉しさはまさに躍り上がるばかりのものだったのです。事実、基金の理事長としての原さんは、女であれ男であれ、これ以上の方は世界中を探してもいないというほど、見事に理事長職を務められました。この点にはすべての基金関係者が賛成してくれると思います。

もっとも、原さんが理事長を引き受けられてからも、基金は文字通り茨の道を歩んで来ました。基金の意義は、マスコミからも、政府からも、「慰安婦」の支援団体からも、一部の元「慰安婦」の方々からさえ十分理解してもらえませんでした。どれほど努力しても虚しいという徒労感、これは基金にかかわってきたすべての者が共有する感情だと思います。基金の理事、呼びかけ人、運営審議会委員は比較的高齢の者が多く、九五年十月に入院した原さんをはじめ、病人が続出しました。家族から早くやめて欲しいと言われた者も少なくありません。

しかし、八十歳を過ぎた原さんが、参議院議長まで経験して、こんな小さな基金で苦労する必要などまったくない原さんが、黙々と任務を果たしている。その姿をみると私たちが虚しいなどと言っておれない。この気持ちもまた、基金にかかわるすべての者の気持ちでした。個性が強く頑固な理事、呼びかけ人、運営審議会委員を抱え、初代、二代と事務局長に恵まれず、周囲からの無理解と冷ややかな目にさらされながら、私たちがここまで基金を放り投げずにやってこれたのは、原さんの存在があればこそでした。こうした原さんの存在の大きさは「感謝のことば」にあるとおりです。

九月六日の朝早く、事務局長の伊勢さんから電話で、理事長が御危篤と聞きました。言い様のない衝撃を受けて、詳しい話を聞くために秘書の石井さん、さらにご遠慮とは思いつつ、佐久の入院先にいる奥様に電話をしました。石井さんの話では、もう今日明日にもご遺体が佐久から東京に戻ってくる可能性が高いとのこと。奥様は、佐久までお越しいただくのは申し訳ないし、集中治療室に入っているから会えない、とおっしゃる。ただ、私は八日から中国行きが決まっており、万一のことがあればどうしようもない。会えなくてもいいからせめて病院に伺いたい、と申したところ、奥様が昼に三十分だけ家族が集中治療室に入れる時間があり、その時なら家族と一緒に入れますと言われたので、そこに入れていただくことにして、とるものとりあえず汽車で佐久まで参りました。

ご家族と一緒に集中治療室に入りますと、原さんが人工呼吸をつけて荒い息づかいでベッドに横たわっていました。何とも言えない気持ちで立っていますと、奥様が「どうぞ声をかけてみて下さい」とおっしゃるので、耳元まで近寄って「原さん、大沼が参りました。早く良くなられて下さい」と、かなり大きい声で話しかけました。そうしたら、私の方にぐーっと顔を向けられて、目を開けようとして、さらに一生懸命何か話そうとなさったのです。

こういう反応があったので、ご家族も私も喜んで、もう一度「原さん、大沼です。基金の皆さんがご回復を待ってます。頑張って良くなられて下さい」と話しかけました。すると、さらにはっきりと私の顔に原さんの顔がくっつく位まで顔を向けられて、必死に私に語りかけようとなさる。余り必死なので、急に体が力ガクッと二度ほどふるえました。私はびっくりして、万一のことがあっては取り返しがつかない、と思って体を離し、看護婦さんに様子を見てもらいました。大丈夫というのでほっとして、その後しばらくご家族とお話をして東京に戻りました。

こういう状態でしたので、あるいは持ち直してくれるのではないかと思ったのですが、

翌七日には原さんはあの世に旅立たれてしまいました。気持ちの整理もつかないまま、日白のご自宅で佐久から運ばれてきたご遺体と対面しました。原さんらしい、穏やかな、しかし威厳に満ちたお顔でした。「威あって猛からず」という言葉が思わず心に浮かぶ、そういった、いつもの原さんらしい、いつまでも私の記憶に残るお顔でした。

佐久の病院で最後にお会いした時は、原さんの口には人工呼吸器がついていたので、声を聞くことはできませんでした。ただ、私はあの時原さんが私に言おうとしたのは、基金を頼む、それを皆に伝えてくれ、ということだった、と信じています。受け取りたいという意思のある元「慰安婦」がおられる限り、可能な限りその方の意思を尊重する形で総理のお詫びの手紙と政府の医療福祉事業、そして国民の償いの気持ちをお届けする。どれほど政治的な困難があっても、個々の被害者の方々の気持ちを尊重し、日本国民の償いの気持ちとの橋渡しに徹する。この原恵を大切にすることが、原さんの遺志を継ぐことであり、私たち基金にかかわる者はどのような困難があろうともこれをやり遂げなければ、と思います。

原さんは弱音を吐かない方でしたが、一度だけ、何か難しい問題があった時に、「だって、これまで基金やってて、いいことなんて何、つなかったじゃない？」と笑いながらおっしゃったことがあります。原さんは、「だからこれきしのことに挫けるな」と、暗にわれわれを叱咤したのでしょう。ただ、「基金やってて良いことは一つもなかった」というのは、九五年以来の私の実感でもあり、実質的な仕事をやっているほとんどの理事、運営審議会委員の気持ちでもあるでしょう。最近、私は在日の軍属の年金問題で大鷹淑子さん、和田春樹さん、高崎宗司さんなどを含む一・二名の方々を代表して政府と各党に申し入れをしたのですが、この時も、大沼が四人の代表に含まれているので名を連ねない、という旨からの仲間などがいて、「嫌われっ子」としての自分を再確認したものです。

ただ、私は基金をやってて良かったことが少なくとも二つある、と思っています。一つは、これまで自分が知らなかった優れた女性の方々と一緒に仕事をすることができた、ということ。大鷹さんや三木睦子さんとは基金への理解と拠金を求めて山形や北海道への「地方巡業」まで一緒にやりましたし、下村満子さんとは、時に真夜中まで激論を戦わせながら強い信頼感をもって仕事をやっています。そのほか、金平輝子さん、有馬真喜子さん、伊勢桃代さんなど、実に素晴らしい女性の方々と「戦友」になることができました。むろん、和田春樹さん、衛藤瀋吉さん、高崎宗司さん、横田洋三さんといった男性の理事、運営委員とも一緒に仕事はしていますが、こうした方は基金がなくてもつき合いのあった方々です。これに対して女性の方々とは、基金がなければ決してこれほど心の結び付いた「戦友」になることはなかったでしょう。

もう一つは、原さんという、ひとりの政治家として、ひとりの人間として、心から自分が尊敬できる方に最後までお仕えできた、ということです。

原さんに理事長を引き受けていただくのに私自身ある程度役割を果たしただけに、私には、こんなにも大変な仕事に晩年の原さんを引っぱり出してしまってお詫びのしようがない、という気持ちが常にありました。ただ、現在まで一五〇名以上の元「慰安婦」の方々

に日本国民の償いの気持ちをお伝えし、そのほかにもさまざまな基金の活動を歴史に刻むことができたのは、原さんがおればこそでした。

もちろんこれは、基金の全員が、元「慰安婦」に償いを、という信念の下に、政府部内、市民、メディアその他の分野の基金の支持者の協力を得て達成したことです。しかし、何度も何度も前述した徒労感に押しひしがれながら、基金関係者が全力を尽くしたのも、原さんが黙々と基金と共にあればこそ、だったのです。原さんが生前言っておられたように、基金の仕事に一般的な意味での「成功」はありえず、ただ元「慰安婦」の方々に償いをという日本国民の気持ちを歴史に刻むことである以上、原さんという稀有の人の存在は基金にとって、そして日本の歴史にとって、決定的な意味をもったのです。

この稀有な方と、私はサハリン残留朝鮮人の運動以来同じ方向を向いて歩むことができ、基金で四年間お仕えすることができました。原さんのお陰で、ひとりの人間が誠実に問題に立ち向かうことの意味を、原さんという存在を通して知り、肌で感ずることができました。ひとりの人間として、こんな幸せはなかった。そう思います。

原さん、本当にありがとうございました。

メッセージ

原 文兵衛理事長を偲ぶ会

「基金」の進展に献身的なご尽力

外務大臣
河野　洋平

本日は誠に残念ながら出席がかないませんが、この場をお借りして故原文兵衛理事長を偲び一言ごあいさつさせていただきます。

私が副総理兼外務大臣の職にあった平成七年七月、故原文兵衛氏を理事長とするアジア女性基金が設立されました。それ以来故原理事長は、九月に急逝されるまで、アジア女性基金事業の実施のために、実に献身的なご努力を重ねられてこられました。アジア女性基金関係者の皆様も故原理事長と共に一丸となって、この難しい、しかし、やらねばならぬ

問題に誠実に取り組んでこられたわけですが、故原理事長はまさにこのような皆様の努力の大きな支えでありました。そのようなかけがえのない原文兵衛氏のご逝去は、アジア女性基金の関係者の皆様にとって極めて大きな打撃であると思います。アジア女性基金事業の進展を心から祈り、応援してきた私にとっても、誠に痛恨の極みであります。この場を借りて、改めて故原理事長のご冥福をお祈り致します。

警視総監や参議院議長等数々の要職を歴任され、日本の安寧と議会政治の発展に生涯を傾けられた故原理事長が、高齢をおしてアジア女性基金のために最後の力を振り絞ってご尽力をされたことは、我々の記憶に深く長く留められるでありましょう。

残された我々としては、故原理事長の意志を継いで引き続き弛まぬ努力を払っていかねばなりません。政府としても、これまで二人三脚で進めてきたアジア女性基金の事業が前進するよう、出来る限りの協力をして参りたいと考えております。

最後に、改めて故原文兵衛理事長のご冥福とご家族の皆様のご健勝とご発展をお祈りし、私のごあいさつと致します。

アジアの被害者へのお詫びを進める

元内閣官房長官
五十嵐　広三

原文兵衛先生、ご指導をいただいてありがとうございました。

先生は、私の人生で知り得たもっとも尊敬する政治家でした。

原先生には、サハリン残留韓国・朝鮮人問題や元従軍慰安婦問題で、計り知れないご苦労をお掛けし、ご尽力をいただきました。

私はサハリンやソウルにご一緒し、被害者の方々の悲しみと怒りの叫びを浴びながら、静かに、じっと聞き入っている、あの原先生の厳しくも人間性に充ちた横顔を忘れることができません。

我が国が、アジアの被害者の方々にお詫びの責任を果たし始めているとすれば、それは原先生の力によるものであろうと思います。

原先生、ありがとうございました。

心からご冥福を祈ります。

体調不良のため上京できないのが申し訳なく、残念です。

奥様、どうかお許しください。

慈雨のごとき 優しいお気持ち

在中国日本国特命全権大使
谷野　作太郎

原文兵衛先生の突然のご逝去の報に接し、なお信じられない思いです。原先生は、その内に秘められた静かな闘志とともに、社会的弱者の人たちに対する優しさといたわりをいつも忘れない方でした。私も、いずれ自由な身になった折りには、先生のお好きであったお酒でもおすすめしながら、昔話をいろいろとうかがいたいと思っておりましたが、いまはそれも果たせぬ夢となってしまいました。かくなる上は、かさかさした、うるおいの欠ける昨今の世の中に、天から少しでも慈雨のごとき原先生のやさしいお気持ちが届けばと思います。

ここに、謹んで、原先生のご冥福をお祈りいたします。

「基金」の信用と権威を高めた

在インド日本国特命全権大使
平林　博

女性のためのアジア平和国民基金（故原文兵衛理事長を偲ぶ会）に際し、一言ご挨拶をお送り申し上げます。

「基金」の下で、戦後処理問題のうち人道的に最も重要な案件の一つでありながら、最も困難な問題であったいわゆる慰安婦問題が、ここまで進展を見、また、さらに、今日的な女性問題についての各種のイニシアティブが取られるようになったのは、多くの方々の並々ならぬ労苦のお陰でございます。

なかでも、故原理事長のどっしりとした風格、あたたかいお人柄、中庸を得たお考えが関係者を励まし、また、その団結を維持することにいかに貢献したか、参議院議長まで務められた故理事長の声望と気迫が、どれだけ「基金」の信用と権威を高め、広く各界の理解と支持を得ることに力があったか、はかり知れないものがございます。

私自身、原理事長の謦咳に接し、また献身的なお姿に頻繁に接する光栄を待て、常に感動と感謝あたわざるものがございました。原理事長の下での「基金」活動により、慰安婦問題がようやく峠を越し、穏性になられた方々や関係国との和解が、ここまで進んで新たな新たな世紀を迎えることが出来ることに、日本国民の多くが安堵の念を抱いていると存

じます。これもひとえに故理事長のお陰でございます。

今は亡き故理事長の面影をいつまでも胸に抱きつつ、ご冥福を心からお祈り申し上げるとともに、令夫人に対し、深くお悔やみと感謝の気持ちをお伝えしたいと存じます。

「基金」を運営し、また「基金」を支えておられる皆様が、亡き理事長の大きな遺志を継いで、さらに崇高なる事業を発展させていかれることを確信し、私もまた「基金」に関与することが出来たことを誇りに存じていることを銘肝して、心からのご挨拶と致します。

「感謝のことば」進呈

理事長職務代行・副理事長
金平　輝子

（「感謝のことば」は二頁に掲載）

献杯ごあいさつ

理事
石原　信雄

ただいま、多くの方々から原理事長に対する思いが語られ、アジア女性基金の今日あるは、原理事長のお陰であると、しみじみと感じている一人でございます。

私は、「基金」がスタートして途中から理事として参加させていただいたのですが、ちょうどそのころ、「基金」の在り方をめぐって大変な議論がたたかわされ、また内外の評価も批判も交錯する中で、原理事長が泰然として多くの意見を聞いておられ、大所高所から「基金」の向かうべき方向を示された姿をいま思い起こしております。

私自身は、実は、若いころから原先輩には大変にかわいがっていただきました。私は昭和三十年代の初め、鹿児島県庁に勤務しましたが、戦前、原さんという大変立派な職長がいたということを古い人から聞いて、お名前はよく知っていました。その後本省に帰りましてから、原先生が東京地方区から参議院議員に当選され、地方行政委員会に入ってこられました。そして地方行政委員長として長い間、ご指導をいただきました。

ちょうど「基金」におけるような状況が地行委にもあり、参議院では与党と野党の逆転現象が起こり、自治省から提出する法律案が委員会では否決され本会議で可決されることがしばしばでした。そういう中で、野党から厳しい意見が出されたけれども、原委員長はじっと聞いておられ、落とし所をちゃんと決めていただいたように思います。

これまで多くの皆さんが原理事長のご人徳、温かいお心についてお話がありましたが、ここで原先生の遺徳を偲び、ご冥福をお祈りして、献杯をさせていただきます。

思い出のことば

そのお姿に力をいただいて

理事　下村　満子

いま原理事長のビデオを見て、改めて、身近に理事長とご一緒した日々を思い浮かべて、胸のつまる思いがいたします。

私は、この「基金」設立の最初から呼びかけ人・理事として関わってきました。正直申し上げて、原文兵衛参議院議長が理事長になられるという話をきいて、社会的地位の高い方、偉い方だから、そのステイタスでなられるのだと最初は理解しておりました。ところが実際に理事会その他諸々の席にご一緒させていただき、えーっ、いまどき政治家の中にこういう方がいらっしゃるのかと、私にとってはある種の衝撃でした。理事長は本当に誠実で、本当に心から一生懸命、理事長のお仕事をなさっていらっしゃいました。

「基金」は発足の時から、さまざまな批判に直面して危機的状況にありました。マスコミや運動体からも批判攻撃を受け、元「慰安婦」の方々からも不満の声があり、そんな集中攻撃を受けておりました。理事会も真っ二つに割れそうな状況で、夜中の二時三時になるまで議論をたたかわせなければならなかった。みんなぴりぴりして険悪な状態でしたが、そんな中、原理事長は、本当に最後までじーっと聞いていらして、存在そのもので私たちの気持ちを鎮めていただいた。偉い方というのは、ばんばんと自分の意見をいうケースが多いのですが、原理事長はほとんどご自分の意見は最後までおっしゃらず、いよいよあぶないというときに一言おっしゃる。それも短く、にこやかに、冷静なお顔でおっしゃる。すると険悪だった空気がすーっと鎮まる。本当にすばらしい方でした。本当に感動しました。私はある財団の理事長をしておりますが、見習うところ大です。

ほとんどの理事や運営審議会のメンバーが、本業よりも「基金」の仕事の方に時間を多く使わなければならない状態が長く続いたのですが、そんなに身をすり減らして努力しても、ただ一方的に「基金」が批判され、情けないやら悲しいやら、肉体的にも精神的にも

限界という状況にたびたびなって、辞めようかなと思ったこともありました。一方、私の家族は、私の睡眠二、三時間という生活を見て、辞めなさい、そんなことでは命を落とすと。でも、私は、ご高齢の原理事長がこんなにまでやっていらっしゃるお姿を見て、私が辞めるというようなことは敵前逃亡といいますか、本当に恥ずかしい、情けない姿だと思いました。母には、原理事長がいかにすばらしい方か、そういう原理事長だから私もここまでやってきたし、やれるのだ。いまさらここで私が引けない、やらなければいけないのだと何度も説明し、なんとか力をいただいて今日までやってきたわけです。

私は、アンケートやインタビューで、もっとも尊敬する方は、といわれると、現存し私が存じ上げる三人のお一人に、躊躇なく原理事長をあげております。

突然、この夏、原理事長が亡くなったとお聞きし、茫然自失のとき、母から電話がありました。私が出ると途端に、母は電話の向こうで号泣し、「満子、悲しいでしょう、本当に残念ね。悔しい」と長いこと泣きました。一度もお目にかかったことのない方の死に対し、あんなに激しく泣いた母は初めてでした。私自身びっくりすると同時に、やはり原理事長のご人徳というか、そのすばらしさが間接的ではあるけれども、私の話から母にそれほどまで深く心の中に沁み、私と一緒に泣いてくれたのをみて、理事長は本当にすばらしい方だったのだと思った次第です。

原理事長には何のお返しもできず、ただいただくばかり、私の人生の中でいろいろな教訓をいただきました。原理事長とお話をしていて、とくに感動した言葉があります。ある時、「大変でいらっしゃいますね、ご高齢でこんな暑い夏の日もお出になって。お体を大事になさってくださいませ」と申し上げたことがあるのですが、理事長は「下村さんね、私も長い人生を歩いてきて、いろんな人に会いました。けれど基金で仕事をされているみなさん方のように、名誉にもお金にも、なんの得にもならないことのために、こんなにも一生懸命やっているあなた方、こういう方たち、こういう種類の方たちとお会いしたのは、基金に来て初めてなんですよ。それだけでも私はアジア女性基金に関わってよかったなと思っています」とおっしゃったのです。

私はびっくりして、感激して、まさにそのまま理事長にお返しする言葉だと思ったことがございます。仮にも、ほんの少しでもそういうお気持ちをもっていただいたということだけでも、私どもは、本当にありがたく感謝しなければいけないし、これから先、理事長なしでどうしていけばよいのか、みな茫然自失しておりますが、でも何とか理事長のお志を引き継ぎ、無私の気持ちでずっと、この財団がある決着をつけるときまでがんばることが、ただ一つ理事長にお報いすることではないかと私は考えております。今後もくじけずに何とかがんばって、「基金」のためにベストを尽くしていきたいと考えております。

母から、奥様に、私のこの気持ちを満子から伝えてねといわれておりまして、この場をお借りして、お伝えいたします。

「だからこそ、やるのだ」の一言

理事　宮崎　勇

私が原先生のご指導をいただきましたのは、もう四半世紀も前になるでしょうか、私が原先生の勉強会や福田赳夫さんの勉強会に何度か参加させていただいたころからでございます。私は経済屋なもので、主として経済の話を申し上げたわけですが、みなさまの先ほどからのお話のように、先生は会議中はだまっておられることが多かった。しかし、最後に必ず、「きみ、それでインフレーションは大丈夫なの」とおっしゃる。

「私は物価安定が大変重要だということは承知しておりますが、私の仲間の中では私はインフレ容認論者だと見られがちです。それでご心配かと思いますが、大丈夫です」と申し上げると、必ず原先生は「インフレはみんなを苦しめるのだから、それだけは注意をするように」ということをいわれました。経済がご専門の先生ではないのですが、ほんとうによく考えてくださっているのだなあと思いまして、ずっとそれ以来、いろいろご指導をお願いしてまいりました。

ところで、この基金設立の話が出る前に、いわゆる「従軍慰安婦」の方々になんとかしなくてはいけないという話が岩波書店からありまして、今日お見えの三木睦子先生とご一緒にいろいろ仕事をしようということがありました。そうこうするうちに、政府の支援でこのアジア女性基金を設立するという話が出て、そのときに原さんは理事長におなりになることを決心されていたのか、あるいはその前なのか知りませんが、電話をくださって、「一緒にこの問題をやろうじゃないか」という話がございました。私は、この問題は大変重要だが、政府に関係した人がこうした団体で仕事をするのは天下りにもなり、あまりいいことではない、私は、「六十五歳から公職につかない方針で、それに役人の身分でもあったのですから辞退したい」と申し上げましたら、「そんなことは、わかっているよ。僕の方が年も上だし、大事なことなんだから一緒にやろう」といわれました。私はまた、「この問題はいくらお金を出しても、お金で解決できる問題ではありません。先生がおやりになっても、批判されることばかりではないでしょうか。謝罪の言葉をいくら向けられても、それらの方々が救われることではありませんから、もはやむなしい仕事になりかねない。先生も他の人にお任せになってはいかがですか」と申し上げました。先生は、「だからやろう」とおっしゃった。

また、私が、韓国の『慰安婦』の方にお会いしていろいろお話を聞いたことがあるのですが、その話の中で彼女たちは、「われわれは金はほしくない、謝ってほしくもない」といわれた。私が「ではどうすればいいのか」という顔をしましたら、「私の青春を戻してください、そうすれば私は満足します」と、その方はいわれた。私はそれにはまったく絶

何しました。どんなに逆立ちをしても、その方の人間の尊厳性をもった青春は戻ってはこない。「これは大変厄介な仕事だろうと思います」と原さんに申し上げたら、「だからこそやるんだ」と、一言で片づけられまして、私もお手伝いをするようになりました。

先生にはいろいろのことでもおつきあいをさせていただきましたが、まったく学ぶことばかりで、お手伝いすることは何もなかったと、恥じております。さきほど、会議が十時十一時になると、「理事長、そろそろお帰りになったらどうですか」と申し上げても全然お聞きにならなかったというお話がありましたが、実は私が体調をくずしまして久しぶりに理事会に出てきたときのことですが、十時か十一時ころになりますと、トントンと私の背中をたたいて、「もうそろそろ、きみ、帰りなさい」といわれて、ご自身はお帰りになるということはおくびにも出さずに最後までいらしてくださった。そんなことを、ほんとうに昨日のように思い出します。

心から原さんのご冥福をお祈りし、奥様はじめ皆様方、今後とも私どもを引き続きご指導くださることを、お願いいたします。

あの笑顔にさそわれて

三木　睦子

私は、原先生を困らせるばかりで、ここへ来てものを申し上げるのも気がひけるのでございますが、遠慮しながら、一言申し上げます。

原先生が警視総監でいらしたときに、なんだかすごく優しそうな警視総監よ、と申しました。丸山鶴吉さんですか、「ごつごつしていない」というと、「そりゃそうだよ、奥様が町村農園の総本家のお嬢さんなんだよ。だからあれだけおっとり落ち着いていらっしゃるのかしらね」というような話を、若いころにしたものでございました。私の長男は「マチ」と申しておりますが、町村太郎と小学校の同級生だったりして、なんとなく内々の気持ちで原さんとお付き合いしておりました。私は大変わがままで、じきに腹を立てるものですから、この「基金」のことも、国連の女の方が…クマラスワミさんですか、出した報告書を日本流に手直ししたのじゃないかなんて、かんかんに腹を立てて、私、もう辞めると申したことがございます。辞めるといっても、やっぱり原さんの「基金」のことというのは、心の痛む問題で、何とか早く解決しなければいけない。相手はどんどん病気だったりとくなってしまったりするので、早く解決しなければと、お金を集めて廻りました。ずいぶん地方行脚もいたしました。大鷹女史も一緒に行っていただき、九州から北海道まで募金集めをやっておりました。でも、そうしながらも、やはり、「基金」についてああでもない

こうでもない、例えば八月十五日に出した、あんなみっともない広告出すのだったら、新聞社から寄付をたくさんもらわなくてはなどといったこともございました。

原先生はいつでもにこにこと笑ってらして、私に、つご苦労かけますねえ」とおっしゃるのです。私もついつい、あの笑顔に誘われて、地方へまいりますと、「もう基金とは関係ないんです」なんていいながら、「少々でもお金があったら、私にくだされば、基金の方に回せるのですけれども」と、ねだったりいたしました。政治家の嫁さんというのはものもらいができるのかなと自分で思いながら、ほんの何千円ぐらいのものでも原先生のところへお届けすると、お目にかかるたびに、にこにこと、「この間はありがとうございました」とおっしゃってくださるのです。私が地方に行ってお話しても、感激してさっとくださることはなくても、少々でも原先生はよろこんで受け取ってくださる。それが私にはうれしかったのです。悪口をいい歩いているものですから、身内のものからさえ小言幸兵衛だとか大久保彦子さんとかいわれる私ですが、原先生の前では大変おとなしいお嫁さんになっておりました。

何かで外でお目にかかったときに、帰りに、「車はあるの」といつも聞いてくださるんですね。私はいつも電車やバスを乗り継いで歩いているのをよくご存知なんです。そうして帰りのことを聞いてくださるのです。「今日は車を用意しています」と申し上げると、「そう、よかったね」とおっしゃってくださるんですね。私はもう自分のおじさんか何かの感じで、やさしくしていただいているのにつけあがって、ずいぶん勝手なことをいたしましたけれども、原先生のことを思うと、これからは少し良いおばあさんにならなければいけない、やさしくておとなしい未亡人になることを先生のお写真の前で誓いたいと思います。

今日は、私など跳ね回っているものを仲間に入れていただいて、ほんとうにありがとうございます。

ハランベー会のこと

元環境庁長官官房広報室長
瀬田　信哉

原先生が環境庁長官でした昭和五十七年四月から、官房広報室長としてお仕えし、その後もずっとお付き合いいただきました。

原先生が環境庁長官のとき、衆議院の本会議で、いま外務大臣の河野洋平先生――当時は新自由クラブの代表だったと思いますが――が地球環境問題について代表質問をされました。原長官がお答えになったのですが、議場では、とくに自民党の議席からは「どうで

もいいことだ」というヤジが飛んだということがありました。

その点では当時の環境庁長官も、割に合わない仕事でございました。にもかかわらず、原先生は、それから十七年の間、私ども環境庁の、あるいは環境庁の記者クラブの人たちとずっと身内のようにお付き合いをしてくださいました。今の環境問題の厖大さを思うとき、アジア女性基金の問題も二一世紀には割に合うことになると、今までひたすらにおやりいただいている先生方に申し上げたいと思います。

さてご紹介にありました「ハランベー会」とは何だということをお話したいと思います。

昭和五十七年、一九八二年、ケニアのナイロビで、ストックホルムで開催された国連人間環境会議の十周年を記念したUNEP（国連環境計画）管理理事会特別会合が開催されました。原先生はロンドン経由でナイロビにおいでになり、ロンドンではナショナルトラスト本部をご訪問になって、それが日本型ナショナルトラスト運動を定着させるきっかけになったのです。

ナイロビでの演説は日本語で話されていたのですが、最後に英語でスピーチされた。「ハランベー」というのは、スワヒリ語で「ゴートゥゲザー」「みんなで協力していこう」という意味だそうです。そこで、「私の名前は、はらぶんべい。詰めてしまえば、はらんべえ。議長、私はハランベーといってこの演説を締めくくりたい」と述べられました。やがて環境庁長官をお辞めになった後、当時の環境庁担当の社会部中心の記者は通称息子というかやんちゃ者でしたが、彼らと一緒に飲む会をこしらえました。目白の原邸におうかがいして、正月、あるいは四月の先生のお誕生日の前後に「ハランベー会」を開くのが恒例になりました。

その後アルトサックス奏者・渡辺貞夫さんのアフリカでの音楽の採譜の中に、ハランベーというのがあることが判明しました。「ハランベ、ハランベ、ハランベー」というのです。朝日新聞の亡くなった船越という記者がそれを唄いだすと、それにのっていろんな人が踊りはじめる――というようなことを、十数年つづけてまいったわけです。船越さんも四年前に亡くなり、ハランベー会では、原先生が二人目の故人になられたわけです。そういう楽しい会でしたので、議長公邸でも、繁みから腰ミノをつけヤリに似たものをもった恰好をして踊って出てくるというように、皆が腹をかかえるようなことをやったのでした。

そういうたわいもない会ですが、そんなやんちゃな子どもたちといいますか、やからを、原先生も奥様も、非常にいとおしく思っていただいたと、私は思っております。

「ハランベー会」は目白のお宅か、議長公邸でしたが、もうお二人に気苦労をおかけすまいと思いまして、今年は椿山荘で六月十九日の昼食にご夫妻をお招きしようということになり、その時は鋼路や青森からも記者たちが集まりました。それが最後になってしまいました。

今日おいでの原家の方々のまわりに、その他大勢として原さんを囲み、騒いでいたやからがいたことをみなさまにご紹介して、私の追悼のことばにさせていただきます。

原理事長夫人　原　光子さん

ごあいさつ

みなさま、本日は、十二月のお忙しい中、このように多くの方々が主人の偲ぶ会にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

主人は、みなさま方には、生前、大変お世話になりまして、また、ただいまは次々とみなさまからお話を頂戴いたしましたが、心のこもった、本当にありがたいお話ばかりでございました。また、さきほど、金平さんからいただきましたみなさま方の主人への感謝のおことばに、私はもう胸がいっぱいでございます。主人もうかがっていて、どんなによろこんでいることかと存じます。

本日、お使いくださいましたこの会場は、以前、警視庁総監の公舎がございました。主人は昭和三十六年に総監になり、入れていただいたのがここの公舎でした。大変立派な公舎で、会議室が多く、お役所のような感じでしたが、奥の方の住まいは和風で住み心地もよく、いまでもなつかしく思い出しております。また主人は若いときに、――ちょうど戦争中ですが、警視庁の課長をさせていただき、やはりこの近くの官舎に住ませていただきました。主人にとりましては、この土地は、大変思い出の多い、なつかしいところでございまして、そのことでも大変満足しておりますことと存じます。

「基金」のみなさま方には、いろいろとお世話さまになりまして、ありがとうございま

した。いつも主人が感謝しておりましたことは、みなさまがそれぞれにお忙しい中で「基金」のために、ご協力いただいているということでした。「基金」に参りましてから一年くらいはいろいろと戸惑いもあったようでしたが、そのあとは大変気持ちよくみなさまと仕事をさせていただき、生き甲斐のように、「基金」にうかがうのを楽しみにしておりました。「基金」の仕事は、日本の戦後処理の一端として後に歴史として残ることだから、自分として一生懸命に尽くすのみだと申しておりました。

この夏も例年の通り軽井沢に避暑に行っておりましたが、途中二度も上京いたし、大変元気でございましたが、八月末、急に熱が出ましたので、すぐに佐久総合病院に入院いたしました。もうその時は肺炎がひろがり、高齢のため薬石効なく、週間で亡くなってしまいました。

このような次第で、みなさまには大変ご迷惑をおかけいたしまして、申し訳ないと存じております。主人も心残りであったと思いますが、八十六歳という高齢まで、みなさま方とご一緒にお仕事をさせていただいたことは、大変幸せなことではなかったかと存じます。

本日、このようにお集まりいただきましたみなさま方に、あらためて心からの感謝を申し上げて、ごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

閉会ごあいさつ

理事（前副理事長）
衛藤　瀋吉

本日は、寒い中、しかもお休みの日にお集まりくださいまして、ありがとうございました。すばらしい想ぶ会だったと思います。一生忘れられない雰囲気を噛みしめながら、終わりたいと思います。

奥様のご心情こめられたお話は、こころに深く刻み込みました。奥様、ご令息、お嬢様方、わざわざおいでいただきまして、ありがとうございました。

そして、御出席のみなさま方、ありがとうございました。

「基金」の仲間も、また気持ちを新たにして、仲良く――時に激しい議論をしても――心を許しあっていきましょう。

原理事長は、大変まじめな方だけれど、お茶目なところがございまして、私は、何人かについて原先生の人物評をうけたまわったことがございますが、にやりとするようなユーモラスな人物評もありました。いずれ日をあらためてご紹介いたします。多分、家へお帰りになると、奥様にさんざ、今日は衛藤のやつが眉釣りあげて怒鳴ってネ、とかなんとか――、そういうお話があったのだろうと思いますが、またの機会に奥様からもうけたわりたいと思います。

今日は、ほんとうに、ありがとうございました。

あとがきに代えて

専務理事・事務局長
伊勢　桃代

原文兵衛理事長が平成十一年九月七日に急逝されました。

九月十一日に原光子夫人が喪主として、そして小渕恵三内閣総理大臣・自民党総裁が葬儀委員長を務められ、葬儀が行われました。追って十二月十二日に催されたアジア女性基金による「原文兵衛理事長を偲ぶ会」の記録が、この冊子です。

この会は、基金の大黒柱となり支えて下さった故原理事長への感謝の気持ちを捧げ、在りし日のお姿を偲びたいという基金関係者の一致した強い願望の下に行われました。

原理事長のお人柄とご功績を反映して、参加された方々お一人お一人のお言葉に、人間としての原文兵衛氏への深い思いと、感謝の込められたものでありました。基金として、お捧げしました「感謝のことば」は、「原文兵衛理事長、ご苦労をおかけしました。感謝申し上げます」という基金関係者一同の気持ちを込めたものです。原光子夫人は基金関係者のこういった気持ちをよくご理解下さり、繰り返し在りし日の原理事長のお気持ちをお伝えくださって、私共を力づけてくださいます。

ご夫人がよくおっしゃって下さるのは「原は基金の事務所に行き、皆さんとお会いするのをとても楽しみにしていました」というお言葉です。基金は各界から様々な考えと専門分野をもたれた方々が、ご高齢の「慰安婦」被害者に一日も早く償いの気持ちと事業をお届けしなくてはという一途の気持ちで集まっており、理事であれ、運営審議委員であれ、事務局職員であれ、一生懸命ですが、やはりその要は、原理事長のご人格でありました。同時に原理事長ご自身も基金関係者の一生懸命さに動かされておられたということを原光子夫人のお言葉よりうかがい知ることが出来、ご苦労をおかけしたお詫びの気持ちに少々の安らぎを得ております。

この仕事は日本、そして次の世代にとって重要なことであり、難しいからこそ原文兵衛氏を必要としたのであって、ご自分で日本の将来のために、出来る限りのことをするお気持ちであったとうかがわれます。

故原文兵衛理事長のお人柄に関してはいろいろな所で語られております。昭和五十六年十月八日から十四日のサンケイ新聞の連載コラムに掲載された記事の中で、著名なドイツ学者であり大相撲横綱審議会会長をされていた高橋義孝氏は、「人柄は誠実、豪放、謙虚。そして頼りになる人です」とズバリと表現されています。原理事長は、ご高齢にも拘わらず。基金に毎週何日かはお越し下さいました。難しい問題を聞いてくださり、判断を下し

ていただきました。どのような時でも人の言うことをあれほどきちんと最後までお聞きになる方は稀です。また、実情の理解と問題点の把握が実にお早く、主観ではなく、状況にそって判断を下しておられました。どの問題にしろそこには原文兵衛哲学と信条があり、それを貫き通しておいでした。

原理事長は享年八十六歳でした。激動の時代に、警視庁勤務をされ警視総監、そして政治家として参議院の予算委員長を始め、各種の委員会の委員長や大臣に任を果たされた後、参議院議長の重責を全うされました。いわば修羅場を越えてこられた人生であり、どういう状況であれ、正しい道を追求された、そのご姿勢が元「慰安婦」の方への償いをしなくてはというお気持ちにつながったのだと感じられます。

どのような時でもおとりになる故原理事長の公正なご姿勢、それに対する関係者の敬意と信頼があったからこそ、基金は難しい局面を共に乗り越えて来られました。これからも、基金事業の節目節目の成果を故原理事長にご報告し、この仕事を引き受けられたことが間違いではなかったと、ご満足いただけるように願いながら、基金一同、仕事をすすめてまいりたいと存じます。

以文會友　以友輔仁
原　文兵衛　理事長を偲ぶ会

編集・発行
財団法人　女性のためのアジア平和国民基金
東京都港区赤坂二―十七―四十二　赤坂アネックス
平成十二年四月

財団法人女性のためのアジア平和国民基金